

エミリー・ディキンソンの Measurement

——“I’m Nobody”——

浜田 美佐子

(1)

エミリー・ディキンソン (Emily Dickinson, 1830-1886) の作詩法において、最も大胆と思われる点は、ディキンソンが言葉から、その意味を、はずしたことにある。詩人は皆、自分に固有の言葉で語ろうとする。しかしながら、ディキンソンは、それを更に一步押し進め、言葉の約束事であるはずの、「指し示す物」としての言葉 対「指し示された物」としてのその対象、との関係を解体させる。その結果、言葉は、その対象に対し、独自の位置を占めるに至る。対象という「主」に対しての、下僕としての「従」の位置ではなく、言葉は対象から自由になる。言葉は指し示す物であるから、「意味」を持ってはいるものの、その「意味」と同じ価値を持つ、「言葉」としての建造物になるのだ。

これは、どのような必然性によって起こるのか、又、それは、どのような自由をディキンソンに与えるのか、これらのことを考えるのが本稿の目的である。方法としては、ディキンソンの手紙集の中に、彼女が示す独特の物の見方、及び、それを反映すると思われる、彼女の言葉の扱い方、を検証することにより、一見奇抜に映るディキンソンの詩のスタイルが、如何に、彼女にとり、自然な成り行き、且つ、その自然さを究極まで押し進めたものであるのかを、述べていきたい。

(2) 「家」の喪失 ——エミリー家を離れる——

ディキンソンにとって、初めての「我が家」を離れての学校生活は、1847年の Mount Holyoke Seminary である。友人 Abiah Root への手紙 (L.18, 1847年11月6日) を見ると、⁽¹⁾ “I was very homesick for a few days” とはあるが、“But I am now contented & quite happy” と、新しい生活を楽しんでいる様子が分かる。しかしながら、ここで、「家」とは、彼女にとり、特別なものであると述べることを、ディキンソンは、忘れない。

You may laugh at the idea, that I cannot be happy when away from home, but you must remember that I have a very dear home & that this is my first trial in the way of absence of any length of time in my life.

家を離れては、私は幸福にはなれない等と言うと、笑うでしょうが、でも覚えておいて頂きたいのは、私の家はとても特別で、これが、私の人生において、如何なる長さであれ、正直正銘、初めての「不在」という試練だということを。

この文章の中に、“a very dear home” と “absence” という表現がある。そして注目すべき事は、ホリヨウクでの生活が進むにつれ

て、ディキンソンが、この「特別」という感覚と、「不在／欠如」という体験を、対として考えていくようになることだ。つまり、この“a very dear home”と、そこからの“absence”とは、お互い、なくてはならない、一対の関係になっていくのである。

又、同じ手紙の中に、次のようにある。二週間程して、家族がエミリーを訪ねて学校へやって来る。そして彼女が何を喜ばしいと思ったかというところ、*“they were so lonely”*（みんながとても淋しがついていた）というのを聞くことだと言う。更に続けて曰く、*“It is a sweet feeling to know that you are missed & that your memory is precious at home”*と。即ち、自分が人から恋しい（missed）と思われ、自分の思い出（memory）が家で大事（precious）にされているのだと知ること、私をやさしい（a sweet feeling）気持ちにさせてくれるのだと。

ここには、“very dear”と“absence”との間を取り持つ、“memory”が新しく登場する。今、ここに居ないからこそ、その居ない者を恋しく思い、結果、その人の過去の記憶である「思い出」の地位が上がるのだが、この「思い出」の地位の向上は、「私」にはそのことを喜ばしく（a sweet feeling）思わせるという、副産物を与える。一方、「彼ら」には、新しく、私の「思い出」という、「不在の私」を贖うものが与えられる。言い換えると、「不在／欠如」が、反対に、「存在」を補い、「思い出」という副産物が、「存在」という、元の「型」の上に、再生産（reproduce / recollect）され、私にとっても、彼らにとっても、それは、“sweet”で“precious”であるという、ディキンソンが、終始とり続けた、基本姿勢、即ち、マイナスはプラスを補う、の芽が、ここにある。

待ち侘びていたはずのホリヨウクでの学校生活は、しかしながら、翌年には終止符を打たれることが決まる。このことが決定されてからの、兄、オースティン（William Austin, 1829-1895）への、先程の Abiah への

手紙と前後すること三ヶ月後の、手紙（L.22, 1848年2月17日）の中には、“lonely”や“alone”という言葉と交互して、“home”という言葉がちりばめられる。例えば、*“My visit at home was happy... & had the idea of in so short a time returning, been constantly in my dreams”*と、夢にまで思う「家」へ帰ることであるとか、“Only 22 weeks more & home again you will be to stay”と、後22週間たてば、もう「家」から離れないで、いられる（to stay）こと等を、嬉々として語るのだ。そして、この「家」に対する愛着は、離れて暮らした、今程、強くなったことはない、ディキンソンは、離れたことの効用を、次のように語る。*“Home was always dear to me..., but never did it seem so dear as now”*（家はいつでも私にとって大事でしたが、、、今程こんなに大事に思えたことはありません）と。

ここで注目したいのは、ディキンソンが、家族が今ここに居ない淋しさを、彼らが居ないと考える代わりに、自分が今、彼らの所に居ない、という映像を描く件だ。*“I think of the blazing fire, & the cheerful meal & the chair empty now I am gone”*と。ディキンソンはここで、自分の座っていない、空いてしまった、空白の椅子を想像し、自分の大事な家の中に存在していない「自分」の姿を映し出す。これは、今自分が学校で、家から離れ、「一人である」（I am alone）という気持ちにも、彼女をさせるのだが、同時に、悲しくなった時、或いは、悲しくなってみようと思った時（when tempted to feel sad）、その映像を敢えて鮮明にさせ、自分の absence の姿でさえも、自分の大事な家の中の、ワンショットへ、組み込ませることで、不思議な、自分の欠如の compensation にもなっていることが分かる。「居ない」私が、そこに「居る」と。マイナス、プラス、イコール、ゼロと。恰も、「変化」が、かき消されるかのよう。

これは、もう一つの Abiah への手紙（L.

20, 1848年1月17日)に、「欠如」である別れ故の、「プラス」としての再会を、“Oh! Abiah, it was the first meeting as it had been the first separation” (ああアバイア、それは初めての再会だったのよ、だって、初めてお別れを経験したのだもの)と述べることと、似ている。マイナスは、ディキンソンにとって、プラスと等価値を持ちうるのである。そして、失ったものと、失う以前の、エデンの園的原風景を、「損失」と、その結果の新たな「獲得」との双方を描き込むことで、透かして見せる、ディキンソンの「全」の創出の一端を、ここに読み取ることができる。

以上述べた事柄は、ディキンソンの詩に多く見られる、失った体験が、失うことにより、その存在を新たに獲得させる、——例えば、P245 “I held a Jewel in my fingers” (私は宝石一つ指の中で持っていました)の、“an Amethyst remembrance” (アメジストの思い出)のように⁽²⁾——新たに獲得させるという考え方の、原体験とまでは呼べないかもしれない。しかし、これらの手紙が、まだディキンソンが大々的に詩作を始める以前のものである事を考えると、ディキンソンの詩型には、その正当な roots がある事が分かる。それは、Richard Wilbur の言うような、宗教、恋愛、詩人としての名声に、欠けているが故の、「欠乏」のスタイルではなく、⁽³⁾「家」という、人間にとり基本単位であるものにたいするディキンソンの執着、そして、そのユニットを維持しようとする、マウント・ホリヨウク当時の、ディキンソンという人間自体に、その欠乏のスタイルの根拠を見ることができると考える。マイナスはディキンソンにとって、プラスへの懸け橋なのだ。そして、そのことを、ディキンソンは、詩作を始める前から、知っていた。

Abiha への手紙 (L.23, 1848年5月16日)で、“I could not bear to leave teachers and companions before the close of the term”と学業への未練を残しながらも、或いは、“I

tremble when I think how soon the weeks and days of this term will all have been spent..., and I regret that last term, when that golden opportunity was mine, that I did not give up and become a Christian”と、クリスチャンになれたかもしれないチャンス永遠に失ったこと、に心を残しながらも、父親の決定 (Father has decided not to send me to Holyoke another year) に従い、エミリーは、オースティン宛の手紙 (L. 25, 1848年6月25日)で、“I am much delighted with the idea of going home”と述べているように、その年の八月には、マウント・ホリヨウクから完全に家へ戻って来るのである。およそ一年間の、ディキンソンの家を離れての生活は、ここに終止符を打たれる。

(3) 「喪失の家」の創作 ——オースティン家を離れる——

エミリーが、「家」という中心へ戻ってきってから数年後、今度は自分ではなく、教職と勉学の為、家を離れるオースティンが家に居ないことを「欠如」と捕らえる日々が始まる。ここで大事なのは、エミリーはどこに存在しようとも、この喪失の危機から身を守ることができないということだ。このような別れは、極々日常的に起こることであるにもかかわらず、ディキンソンにとっては、“loss”である、ということが重要なのだ。

自分が家から離れれば、「私」は「家」には居ない、となるし、兄、オースティンが「家」に居ないと、「私」が家に居ても、オースティンが「家」には居ないということが、ディキンソンには、大きな損失 (loss) と思われるのである。ディキンソンにとって、兄は、勉学先に居る、のではなく、「家」に居ない、のであり、自分がホリヨウクに居た時は、そこに「居た」のではなく、やはり「家」に「居ない」なのである。「家」は、このように、ディキンソンにとり、死守すべき砦であると同時に、死守している先から、指の間から砂が

サラサラと落ちていくように、この喪失感を回避することのできない、守ることの殆ど不可能な、砦となる。

オースティンが家を離れて暮らすのは、1850年から1854年のおよそ四年間である。⁽¹⁾ その間のエミリーからの手紙には兄を恋しく思う気持ちが時にコミカルに、時に真剣に溢れ出ている。再び手紙集を紐解いて見ることにしよう。

オースティンは、Amherst から数マイルの Sunderland でも教えているが、⁽²⁾ Boston にある Endicott School へ教師として旅立った翌日のディキンソンの手紙 (L.42, 1851年6月8日) から始めてみたい。兄が死んでから一日しか過ぎていないというのに、この欠如の意味は痛烈であると、ディキンソンは描く。

例えば、私達の現在の心境 (concerning our state and feelings) をお伝えしたい、と筆者であるディキンソンは言う。取り分け、もうここには居ないということを思い出す時には (particularly when we remember that 'Jamie is gone awa') と、恰も、既にオースティンは、ここで思い出の世界へ入れられてしまったかのように、“remember” という言葉をディキンソンは使う。

妹の Vinnie (Lavinia Norcross, 1833-1899) はというと、殆ど「そこ」へ行ってしまった ('almost there')、うら若い女性についての悲し気な歌をピアノで、奏でるという。父親 (Edward, 1803-1874) はというと、聖書を読んでいるという。何故なら、現状に対する慰め (consolation) としてだと言う。まるで、オースティンが死んでしまったかのような描き方だ。母親 (Emily Norcross, 1804-1882) はというと、涙ながらに未来のことに思いを馳せるという。終わりが来ませんようにと。本来の引用の詩句は “Sabbaths have no end” なのだが、ここでは “Sabbaths” の代わりに “Austins have no end” と、あの世、が掛っている。

私達家族の感情はどうかというと、オース

ティンの居ない危機感を、お父さんはドアを守り、お母さんは窓を守り、だから私とヴィニーは外からの攻撃に対し安全で、私達の心 (hearts) さえ下に閉じ込めることができたなら恐ろしいものはないのだと言って、オースティンの居ないことを、三つの感情さえ押し込めておけばよいのだものと表明する。これは、エミリーを中心に考えれば、父と母と妹の感情をエミリーの胸の中へ “I've got all but three feelings down” と、四つ目の不在を顕わにすることとなる。オースティンは、「いない」。

このボストンへのオースティン宛の最初の手紙はコミカルである。淋しきのドラマ仕立てという意味でも充分楽しめる。しかし、問題は、このような手紙が何回も書かれたという点にある。

6月15日付け (1851年) の手紙 (L.43) では、“I would not that *foreign* places should wear the smile of home” と、オースティンがボストン (=foreign) での生活を家の生活と同等のものには感じないようにと望んでいる。家に優るものではないようにと。又、6月22日付けの手紙 (L.44) では、兄の居ない再現フィルムが回される。“Two weeks of your time are gone, I cant help wondering sometimes if you would love to see us, and come to this still home” と、兄の居ない静かな家の中で、二週間という時が流れて消える。あなたは私達に会いに来たいの? でもあなたは居ないわと。このフィルムは、静まりかえった家の中に、「あなた」の存在の欠如を語る。

6月29日付け (1851年) の手紙 (L.45) でも、兄が家に居ないのだという映像を “‘we are not all here’ ” という形で食卓の準備をする際のナイフや、コップの数を間違えるということを示す。又、残されたディキンソンの家族は三人という majority であるにも拘わらず、オースティンという一人を欠くことにより、その majority 側が、欠員を痛く強く感じることを、次のように述べる。“We

miss you now and always — when God bestows but *three* and one of those is withholden the *others* are left alone”と、三人エミリーには与えられていても、私たち三人だけ (alone)、という形で説明されるのだ。つまり家族という単位は、ディキンソンにとって、一人欠けても不完全になってしまうものなのである。

そして、居ないはずの“Austin”という名前が、打ち上げ花火であるかのように、「Austin」、或るいは「いない Austin」と鳴り続けるのだ。

... he took *your* seat at the table which led to some remarks concerning yourself, and your absence, which your ear may hear. ‘Somehow he and Austin always were good friends ..., and there was something in him which always made *folks mind* — when Austin was at home Austin was *in town*’ tho’ this I comprehend not the necessity of *stating* it seeming quite instinctive, and not needful to prove.

混み入った文章だが、言わんとしていることは、はっきりしている。オースティンが家に居るとことはオースティンは町に居ることだとは、全部反対から言えば、オースティンは今町に居ないように、家にも居ない。だから、オースティンの椅子に、来客も座ることもできれば、(he took *your* seat)、その来客が、オースティンのことを実際語るのか、(which led to some remarks concerning yourself)、或いは、その来客が、オースティンの椅子に座ってしまうことで、オースティンの不在 (and your absence) を語るのか (which your ear may hear)、いずれにせよ、兄の double のような形で、(Somehow he and Austin always were good friends)、この来客と、ここに居ない兄とがセットで、(and there was something in him which

always made *folks mind*) 語られているのが分かる (when Austin was at home...)。

これはディキンソンの詩の中にも見られる、不在／欠如、の埋め合わせ方と同じだ。つまり、このダブル、コピー、とは新しい創造なのだ。オースティンがオースティンであり、オースティンでなくなる世界、来客が来客であり、来客でなくなる世界、欠如が欠如であり、欠如でなくなる世界、この世がこの世であり、この世でなくなる世界、死が死であり、死でなくなる世界、神が神であって、神でなくなる世界、言葉が言葉であって、言葉でなくなる世界、そういったオリジナルの再利用における新しいコピーの世界、オリジナルと全く別の存在である新たな creation の世界の芽がここに見られる。

オースティンがボストンへ行ってから五ヶ月弱の、エミリーのオースティンへの手紙 (L.59, 1851年10月25日) を見てみよう。これはオースティンが、故郷アマストで開かれる“Cattle Show”といった、言わば、秋祭りの為二日間だけ家に帰った後、淋しい (Oh I am so lonely!) という気持ちを連発する形で話は進むのだが、「家」についてのコメントが次のようにある。

Our fire burned so cheerfully I could’nt help thinking of how many were *here* and how many were *away*, and I wished so many times during that long evening that the door would open and you come walking in. Home is a holy thing — nothing of doubt or distrust can enter it’s blessed portals. I feel it more and more as the great world goes on and one and another forsake, in whom you place your trust — here seems indeed to be a bit of Eden which not the sin of *any* can utterly destroy — smaller it is indeed, and it may be less fair, but fairer it is and *brighter* than all the world beside.

初め、明々と燃えている暖炉が「家」の象徴のように描かれている。そこでディキンソンは、何人が「ここ」に居て、何人がここに「居ない」のかを考えてしまうと言う。そして、長い夜を過す中、ドアが開かれ、そこに兄が立っていたらと、幾度となく願ったと言う。「家」とは「聖なるもの」だとディキンソンは言う。そこには「疑ぐり」や「不信」がないからだと言う。そして、時が巡るにつれて、何人かが去って行く時、ここ、「我が家」が、エデンの園の様相を呈してくると言う。というのも、罪というものが誰の上にあったとしても、その罪が壊すことのできない存在こそが「家」であり、且つ、「家」という「エデンの園」だからと。ディキンソンは、「本物」のエデンの園に比べれば、「家」はちっぽけで、美しさにも欠けるかもしれないが、それでも、回りの全てのものと比べた時、「家」程、輝かしく美しい存在はないのだと言う。

ここで注目すべきことは、彼女の喪失感のメタファーは、その喪失感故に、地上に留まらず、天上へもそのコンパスを伸ばしうることだ。即ち、「家」を起点とした、「ここ」(here)と「ここにいない」(away)、或いは、「行ってしまう」(forsake)という言葉は、二重の意味を持つ。一つは、地上での「家」を中心に、「居る、居ない」を繰り返す喪失感であるが、もう一つは、それとユニゾンで、「あの世の家」に、居る、居ない、が語られるのだ。

これは、兄、オースティンが、「我が家」に今存在しないことは淋しいことではあるが、もう少し大きなスケールで、いつか「あの世の家」に行くことを考えると、そちらの大きな喪失の影では、多少の年月の兄の現在の不在は、耐え忍べることになる、という考え方を一方で示す。他方、「我が家」をして、既に、あの世の「エデンの園」を彷彿とさせるということは、「我が家」に永遠の「エデンの園」の光を燈すだけでなく、「我が家」をして、「エデンの園」という「あの世」へ、移築させたかのような印象を与え、死というもの

が、いつか我々を離れ離れにさせてしまうという、喪失の味わいを、一層、濃くすることにもなる。そして、「地上の家」が、いつかは失われてしまうものであるならば、余計、私達をして、私達の心の寄り所として、「我が家」を、私達の気持ちの凝縮所として、今、暖炉の火が燃えているように、心の明かりとしたいものだと、ディキンソンは願う。

言い換えると、兄が家を離れる、私達がいつかこの世を去る、或いは、「我が家」は、いつか、子供達の成長につれて、今のような「我が家」ではなくなる、という「欠けること」は、欠けることによって初めて、欠けることを知らない、「全体」に結びつくことを欲するのだ。

しかし、結びついたところで、それは安心感を与えるばかりでなく、決定的な別離を同時に思い起こさせもする。エデンの園といえども、それは地上で味わえるものではないのではないかと。地上を離れなくてはならないのだと。

つまり、一方で、「エデンの園」的、永遠の「全」に連なる、という感覚が、「欠ける」ことを補うはずなのではあるが、そこへ連なることすらも、地上での損失をカバーしきれるとは考えていないところに、ディキンソンの特色がある。

よって、ディキンソンの「欠ける」哲学が、ここに誕生する。即ち、「家」がそうであるように、ディキンソンの起点は、まず「欠ける」ことを認識することにある。そして、その「欠ける」という認識を持ち続けながらも、「欠如」こそが、「全」を贖うと、考えるに至るのである。何故なら、「欠ける」ことなくして、「全」への渴望は起こり得ないからだ。

時は過ぎ、二年後、Harvard Law Schoolへ、オースティンが入学してからの手紙を振り返ってみても、淋しい、ここ(家)に居てくれたら、私達を覚えておいて、が繰り返される。オースティンが、ボストンで教職に就いた翌日から、オースティンの「思い出」を語り始めるディキンソンであるのだから、驚

く訳ではないが、その度重なる陳情は、このエデンの園のような、「家」の存続の危うさを伝える。又、それ故の、存続の願いを伝える。

1853年5月7日付け、オースティンへの手紙(L.122)で、ディキンソンは次のように語る。“A week ago, we were all here — today we are not all here”と。オースティンが数日間、家へ帰って来た後の手紙なのだが、「みんな」がここ、家、に居るのか、「みんな」は居ないのかが問題となっているのは、以前と同じだ。

そして、覚えていてねと願う。即ち、“You will ride today, I hope, or take a long walk somewhere, and recollect us all, Vinnie and me, and Susie and Father and mother and home”と。家族の構成員全員の名前を挙げて、後にオースティンと婚約、そして結婚する、スージー (Susan Gilbert, 1830-1913) の名も加え、それに加えることに「家」をまで、或いは、「家」こそ、再び思い出して、と願うのだ。

そして、思い出して欲しい理由を、透かさず伝える。即ち、“for we all think of you, and bring you to recollection many times each day — not *bring* you to recollection, for we never put you away, but keep recollecting on”と。何故、オースティンが自分達を一人残さず覚えていてくれるべきかという、私達が一人残さず皆、オースティンのことを思い出しているからだと言う。そして言い換えて、思い出す (bring you to recollection) というより、常に心の中に彼が居るのだから、泉が溢れ出るように、この思い出す行為には途切れがないのだ (keep recollecting on) と、思い出の行為の強さ、深さをディキンソンは強調する。

この溢れるばかりの「思い出」を維持していく共同作業は、思い出す方と、思い出される方、(私達がオースティンを、オースティンは私達を) の両者が、同じ熱情を保つことにより、初めて、心の綱引きは成立し、均衡が

保たれ、エデンの園のような全体性が浮かび上がる。又、この関係は、全ての構成員が、同じ思いを持ち続けることに、その意義があり、脱落者の存在は、この熱情の集中力を消してしまう。詩の世界では、このような相反するもののバランスの維持は作り出され、完璧な姿で、しかも、モビールのような風通しのよい形で、固定されるかに見えるが、果たして、現実はどうであったろうか。

ディキンソンの期待度を充分満足させたかどうかは別として、ディキンソン家の人々の、この家族の結束において、少なくとも物理的な意味では、脱落者は出なかった。オースティンはスーザンと結婚したが、エミリー達とは隣りの家に住み続けたし、妹のヴィニーも、エミリー同様、嫁いでいくことがなかった。⁽³⁾しかし、この共同作業は、それを熱情的に語るエミリーはともかくとして、他の家族のメンバーにとっては、疲れる、と今流に、言えることではないだろうか。

エミリー自身、家事労働に疲れ (somehow I have to work a good deal more than I used to, and harder, and I feel so tired when night comes)、そして、そんな労働から早く解放され、兄との手紙の会話を楽しむ為にも、必死でお裁縫をし (so I sew with all my might)、そして、朝がやって来ても、以前程、幸せを感じない (when morning comes and the birds sing, they don't seem to make me so happy as they used to) と、ディキンソンは、オースティンへの次の手紙(L.123, 1853年5月16日) で述べている。

この愚痴の言葉は、あなたが居ないせいだ (I guess it's because you're gone) と、付け加えられながらも、“Somehow I am lonely lately” や “I feel very odd every day” という言葉は、エミリーにとっても、この彼女の「家」という集合体、或いは、彼女のイメージの集約した生き物、「家」、を維持し続けることが、気力、体力、のいることで、容易いわけではないことが分かる。

しかし、彼女は、「家」の機能、「家」とい

う存在の役割を、皆を一つに束ねておくもの、変化を引き起こす「外」から、私達を守る「中」であって欲しいという願いから、オースティンへ、「家」が、あなたを恋しがっているという構図を示さずにはいられない。

We all love you very much. I don't believe you guess how much home thinks and says of it's only absent child — yes, Austin, home is faithful, none other is so true.

「家」は、恰も、主体であるかのように、その「不在の子」であるオースティンのことを、幾度となく考え、幾度となく語るのだと言う。そして、「家」こそ、「忠実」であり、「真実」であるとディキンソンは結ぶ。

これは、甚だ、願望と希望の入り混じったものである。先程の文章を見ても、ディキンソンにとっても、彼女自身、家の内側に居て、家の外に出てしまった、“absent child”を「欠如」の形で、家の中に登場させて、「家」という「全体」を、維持することが困難になってきていることを意識していることが分かるからだ。にも拘らず、そして、これがディキンソンの極めて大きな特徴だと思うのだが、離れているオースティンへ、“Come home!”のエールを送り続けるのである。

例えば、1853年12月13日付けのオースティンへの手紙(L.144)で、ディキンソンは、彼から数日、音信不通であったことが、如何に、家族をして、驚愕たらしめたかを、コミカルに描いた後、再び、力強く繰り返すのだ。“We are all here”と。だから、あなたも、この“all”に入って欲しいのだと。

しかしながら、ディキンソンは、ここで反対に“We are all here”を伝えながら、ここに居ない Austin の「不在」を、マイナスの側面として、強く意識せざるを得ない。だから、“We are all here”に続けて、“still missing you”と言う。そして、その喪失感に更に、あなたに帰ってきてもらいたいのだと、

“and wishing for you”と変わる。そして、しかしながらである、オースティンは直ぐには帰ってこれないことを、ディキンソンは知っているのだ。“knowing you cannot come”と。それに加えることに、今、「あなた」が帰れないだけでなく、今、家に帰ってこれないという、オースティンの不在は、ディキンソンの愛してやまない、死守すべき砦の「我が家」が、既に、昔の「我が家」ではないという、彼女にとっての、絶体的喪失感へとつながるのである。

Oh for the pleasant years when we were young together, and this was *home* — *home* !

ああ楽しい年月、私達が皆小さくて、一諸にいて、そして、ここが、我が家だった、我が家だった時！

この手紙は、直ぐ、いつ帰って来るの、会いたい、(When are you coming home. We do want to see you) と、いつも通りの収束のパターンを示す。が、「エデンの園」は、アダムとイヴにとって、そうであったように、もう、ディキンソンにとっても失われているのだ。そのことを、彼女は、強く意識すると同時に、その欠如の贖い方を模索する。「欠ける」ことを強く意識するが故の、「全」(欠ける以前)への修復の情熱が、ここに、はっきりと、意識されるのだ。

(4) 距離を計る=家の外 ——ヒギンソンとディキンソン——

今まで見てきたように、ディキンソンにとり、「家」は死守すべき砦、即ち、「中心」である。しかし、その中心であるべき「家」は既に、その「中心」を欠いている。何故なら、「家」は、もはや、昔のような「家」ではないことを、ディキンソンが意識しているからだ。そうすると、「家」とは、ディキンソンにとり、正に、「円周」(Circumference)のような

ものだ。⁽¹⁾ 何故なら、円周も又、その中心（家という心の中心）を見詰め、その周りに円を描くが、その円は、Ralph Waldo Emerson (1803-1882) の“Circles”（円）とは違い、⁽²⁾ 円の中心を、その中に保有しないからである。⁽³⁾ 円周は輪であり、「中身」は、はずされている。

「家」がディキンソンにとり、「円周」のように中心を欠いていようと、やはり円周が中心に対して弧を描くように、ディキンソンも又、「家」という中心を離れようとはしない。眼の治療の為の Boston での滞在を除いては、⁽⁴⁾ ほぼ生涯に渡る家の中での生活が展開されるからだ。

では、この中心を欠いた「家」という「ディキンソンの中心」は、どのようにして、その健康状態を保つのだろうか。つまり、中心を既に欠いていることを認識しつつ、如何に、「ディキンソンの中心」としての integrity（整合性）を保てるのだろうか。そこに、手紙として、外の世界へ発信すること、詩作を始めてからは、詩という「自分の家」から発信すること、そして、この章でこれから述べていくように、ヒギンソン (Thomas Wentworth Higginson, 1823-1911) という、時の大家へ発信することの必然性が浮かび上がってくる。

家を離れない、という自分に課した規則の特異性を、ディキンソンは自ら意識している。さながら、P435 “Much Madness is divinest Sense”（たくさんの狂気とはすばらしい正気）と歌うように、ディキンソンは自分の独自性を、彼女自身苦しいのだと、自分の閉塞状態を打破すべく、当時の有名な文芸評論家、ヒギンソンへ救済の手紙を書く。⁽⁵⁾

4月15日付け(1862年)、ヒギンソンへの初めての手紙 (L.260) で、ディキンソンは自分の状況を次のように語る。即ち、“The Mind is so near itself — it cannot see, distinctly — and I have none to ask —” と。自分の心は作品自体へ近過ぎて、はっきりとは見ることができない、それに、自分には、自

分の詩の評価を他に頼む人がいないからと、ヒギンソンの意見を、“to tell me what is true” と、本当のところどうなのかを知りたいとお願いするのだ。

4月25日付け(1862年)、二度目の手紙 (L.261) では、やはり自分では自分の書いた物の妥当性が見えないと、“I could not weigh myself — Myself — ”（私は自分自身を量ることができない — 私自身では—）とガイダンスの必要性を訴える。そして又、詩を書くことの動機を、怖いから歌うのだ (because I am afraid) と、詩を書かねばならない必然性を伝えようとする。

6月7日付け(1862年)、三度目の手紙 (L.265) で、ディキンソンは、ヒギンソンが自分の詩を正当には理解しないであろうことを、次のように述べる。“If fame belonged to me, I could not escape her —” と。そして、“My Barefoot-Rank is better —” と。名声が自分の物であるのなら、私が逃げて、名声が私を捕まえるはず。だから、無駄なこと（名声を追い求めようとする）はやめて、「素足の位」を選ぶと。ヒギンソンの使ったと思われる言葉を引用し、ディキンソンは自分の詩が、‘spasmodic’（単発的）であり、‘uncontrolled’（足並み不揃い）であることを真摯に受け取めながらも (I am in danger — Sir —)、自分には他の書き方ではない (I have no Tribunal)、と伝える。

しかしながら、このヒギンソンという outlet は「家」に自らを縛りつけているディキンソンにとり、初めての「外」と自分をつなぐ、もしかすると、神がディキンソンにとってそうであるように、自分の ‘spasmodic’ や ‘uncontrolled’ を意識させられる上での、大事な、当てゴマのような、存在なのである。

ディキンソンは、自分にとり、ヒギンソンというプロの評論家に対し、手紙を書き続け、作品を見てもらうということが、必要なのだと、次のように語る。即ち、“If I might bring you what I do — not so frequent to trouble you — and ask you if I told it clear

——'twould be control, to me ——”と。ヒギンソンに尋ねる (to ask) こと自体が、ディキンソンが必要としている枠、即ち、“control”なのだと。つまり、ヒギンソンの意見を求めるという直接行動というより、むしろ、ヒギンソンへ、自分の詩を正当に評価できないかもしれないヒギンソンへ、しかし職業人としての評論家であるヒギンソンへ、詩を送り続けることが、そして、自分との距離を計ることが、ディキンソンをして、「家」の中にいながらにして、「外」を見るというバランスを保つ行為であると言うのだ。

それが、正当か否かは別として、ヒギンソンという、テニスの壁へ向けての一人の連習のように、一つの権威に対し、「発信する」ということをディキンソンは望んだのである。神や、エデンの園や、「死」が、ディキンソンの「家」、或いは、「この世」、との距離を計る為に必要のように、ヒギンソンは、ディキンソンにとって、なくてはならない、自分と他との距離を計る為の、一つの measurement を提供しうる、同時代の文芸評論家なのだ。

ヒギンソンへの四度めの手紙(L.268, 1862年7月)で、ディキンソンは、自分が他と違っていることを、“if caught with the Dawn — or the Sunset see me — Myself the only Kangaroo among the Beauty”と述べ、その自分の特異性は、自分にとっても重荷なのだと、“it afflicts me, and I thought that instruction would take it away”とヒギンソンへ教えを乞う。

ディキンソンの、この自分の描写は、示唆に富む。まずもって、彼女は「人間の位」を捨てる。私は一人のカンガルーと。自分の回りには、美しい人間達が居るのかもしれないし、美しい日の出、或るいは、夕日が、私を眩く照らし出し、私はその美しい自然の中で、たった一人、浮き出た存在の「カンガルー」であり、そのことは自分を苦しめるのだという。

注目したいことは、ディキンソンが自分の特異性——人は誰もが、他の人と同一ではな

く、自分という異質な存在を重荷として、他の人間の中で生きているのだが——そんな「自分」という際立った存在を、恰もジャズをバックに、「カンガルー」対「十九世紀アマストの女性」程、唐突なアンサンブルはない)、夕日に、或いは、朝日にスポットライトを当てられて、そのコントラストの中に、くっきりと、Kangaroo と、自分の存在を identify している点だ。右向け右ではないディキンソン独自の個性を、それ以上にもそれ以下にもとらず、又、その個性に寄り掛かることなく、苦しいと認めた上で、「私」として把握していることだ。

回りの世界とコンタクトは持ちたいとは願っている。そうでなければ、ヒギンソンを始め、友人、知人、親戚、に手紙を書き続けることはなかったであろう。しかしながら、ヒギンソンにここで、“instruction”を求めているものの、そして実際、「私」という存在から、解放されたいと願う気持ちはあったろうが、“the only Kangaroo among the Beauty”と自分を認識してしまった人間にとり、逆回転にフィルムを回して、「普通の人」に戻る道はない。

「たった一人のカンガルー」は、自分の詩の批評を、酷評でもよいから、率直に教えて頂きたいと、もし朝焼けの中で捕らえられたなら、或いは、夕日が私を見たのなら、私自身は、その美の中の、たった一人のカンガルーという、忽然とした「自己」の存在を、「一般」のレールの上で乗りきらない、「私」というものを、多分無理だろうと、ディキンソンも思いながらの、自分の「系列化」の依頼なのだ。

しかも、このリクエスト自体、彼女が「是正」のターゲットを、そもそも「是正」という中心点を欠いている以上、(All men say 'What' to me, but I thought it a fashion)、⁽⁶⁾そして自分という他の中での異和感を、これだけ強く認識している以上、(the only Kangaroo)、初めから、無謀な計画なのだ。

私の詩を評論して下さい。でも私は他の人

と違うことを意識しているのです。それを、「私」であることを、やめるつもりはありません。私を苦しみから救って下さい。でも、私はこのカンガルーという言葉の使い方、夕日をバックにしたそんな光景に痺れる (You say I confess the little mistake)、とっているのです。そんな人間にとって、「違い」は (and omit the large)、克服し、矯正されねばならないものではなく (never consciously touch a paint, mixed by another person)、「違い」を意識し続ける中にこそ (among the Beauty)、自己の完成を見るのだ (I do not let go it, because it is mine)、と。⁽⁷⁾

よって、この四度目の手紙の終わりに、“Today, makes Yesterday mean”と書いてあるのも、「今日」と「昨日」という対照に留まらず、「普通のあなた」が居るから、「普通と違う私」の位置が明確になるわ、と言っているようにも取れる。そして、ヒギンソンへ、名もないディキンソンが、“Are you perfectly powerful? Had I a pleasure you had not, I could delight to bring it”と、「完璧に強力ですか」と尋ねる。名もない詩人のディキンソンが、「あなたに持ち合わせのないものを、私が持っているとしたら、喜んでお渡しします」と述べるのだ。それは、もしヒギンソンが「辞書の本体」とすると、「補足」かもしれないディキンソンの方が、その本体をアシストし、その不備を補うという、形をとることになる。そして、そのことは、その署名にも、“Your Scholar”とあるように、あなたの僕的、あなたの生徒であると同様、あなたと同等である、あなたの学者という、欠けるものが、完璧と思われるものを補足するという、ディキンソンの特異性を表明することになる。⁽⁸⁾ 欠けること、或いは、普通と違うことは、その欠けること (Kangaroo) によって、本体である「全」(Beauty)を贖いうるのだと。

ディキンソンがヒギンソンに、助けを求め続けたのは、自分の特異性を確認し続けたいが為である。自分が、「たった一人のカンガル

ー」であり続ける為には、そのバックに“Beauty”が必要なように。ディキンソンには、一つの権威としてのヒギンソンが、自分の独自性を「欠けたもの」としてでなく、「全」を贖うものとして捕らえ直す為には、必要だったのである。

(5) 普通の言葉とディキンソンの言葉 ——言葉から意味ははずす——

ヒギンソンが、家の中に居るディキンソンにとって、「外」からの距離を計る為に、そして自分の特異性を明確にする為に、必要な「対象」であるように、ディキンソンにとり、“English language”に代表される「言葉」は、⁽¹⁾ 一つの権威として、自分に固有な言語 (例えば、“Whippoorwill”として)、からの距離を計る為に必要な「対象」となる。又、そうやって距離を計ることにより、ディキンソンは、独自の「文脈」とも呼ぶべき、創造の母胎、ディキンソンの「家造り」に着手するかに見える。

何故なら、距離を計ることにより、ディキンソンは、“English language”を、自分の陣地内に引き寄せ、その結果、“English language”は、自分の文脈の中で再利用され、「ディキンソンの言葉」として、誕生させられるからだ。これは、結果的に、ディキンソンをして、普通の意味で使われている、絶対多数 (majority) 側としての「言葉」から、その中心 (中身) であるはずの「意味」を、はずしてしまうかに見える。

例えば、従兄弟である John L. Graves (1831-1899) がアマストを訪ね、そして去っていった時の1856年頃 (もしくは、もう少し早い頃) と思われる、手紙 (L.186) に次のようにある。

Ah John ——— Gone?

Then I lift the lid to my box of Phantoms, and lay another in, unto the Resurrection....

ああ、ジョン——行ってしまったの？

それならば、私のまぼろし達の箱の蓋を開け、もう一人、復活の時まで、横たえて置きましょう、…。

ここでは、現在ここに居ないジョンが、ディキンソンによって、復活まで、姿を現さない、死者と同等に扱われている。

或いは又、アマスト大学で教え、1858年8月には、シカゴの神学校へと去っていった、Joseph Haven (1816-1874) の妻である、Mary への手紙 (L.192, 1858年8月後半) には、次のようにある。

I know you will come again — if not today — tomorrow — if not tomorrow as we count — after the little interval we pass in lifetime here. Then we wont say “Goodbye,” since immortality — makes the phrase quite obsolete. Good night is long eno’....

もう一度、戻っていらっしゃるわね——今日でないとしても——明日には——もし、私達がそう願うように、明日、でなかったとしても——ここ地上で私達が過ごす、ほんの束の間の後では、必ず。ならば「さようなら」は言いません。何故なら「不死」という存在が、「さようなら」という言葉を、無意味にさせてしまいますから。「おやすみなさい」で、充分の「長さ」ですね、…。

ここでは、さっきとは反対に、この世でのお別れが、永遠から見た時の、ほんの一瞬に、変化させられてしまう。

こういう形で、世界を「計る」ことを学び始めると、⁽²⁾ そして、「計る」ということ自体が、計る「対象」に取って変わると、困難は、当たり前のように、幸福と手を取り合ってやって来るし、「家」の閉ざされた空間は、「世界」とつながり合うし、ディキンソンの回

りの人の絶対数の欠如は、P303 “The Soul selects her own Society” (魂は自分の社会を選択する) のように、少数側が勝ち得る世界、つまり、私達の生きている世界の空間が、急に、自分流に、動き始める。

これを、もっと大きいスケールで見詰めると、次のように言える。即ち、ディキンソンは、「言葉」が「意味」という対象に対して、「従」と「主」の関係にあるのを、欠ける「家」の中に居る、やはりどこか、「欠けている」自分のメジャーを使うことにより、この主従関係を逆転させるのだと。

例えば、ヒギンソンが南北戦争に参加する為、South Carolinaで入隊したのを知った後の、彼への手紙 (L.280, 1863年2月) に、ディキンソンは、死なないで下さい、を次のように表現している。

Should you, before this reaches you, experience immortality, who will inform me of the Exchange ?

万が一にも、この手紙があなたの元へ着く前に、あなたが「不死」を経験されるようなことがあるとしたら、誰が、私に、その「交換」のことを伝えてくれるのでしょうか。

これに続けて、死なないで (Could you, with honor, avoid Death, I entreat you) と言うものの、この手紙を受け取ったヒギンソンは、自分が、万が一の、生から死への「交換」を経験していたらという印象を、拭いきれないのではないだろうか。安否の言葉が、安否という内容を越え、ここに、一人歩きし始めるのが分かる。

同じ手紙で、ディキンソンの添えた短い詩の一つは次のようなものだ。

Best Gains — must have the
Losses' Test —
To constitute them — Gains —

最良の獲得は——損失の試練を受けねば
 なりません——
 それらが——獲得——と制定される為に

又、今日気付いたこととして、次のように述べる。“the ‘Supernatural,’ was only the Natural, disclosed”（「超自然」とは自然が明らかにされただけのこと）と。そしてそれに続けて、短い詩が一つ。

Not “Revelation” — ’tis — that waits,
 But our unfurnished eyes —

「明らかにされたこと」——が——待つて
 いるのではなく、
 待っているのは、私達の目なしの目——

“Revelation”とは、聖書の中の「黙示録」のことだ。しかし、「所謂」という、“ ”付きの、Revelation は、その前に述べられた、“ ”付きの Supernatural と似て、権威としての、聖書であったり、私達人間には量り知れない、超自然の存在というものが、ディキンソンの言葉の約束事、彼女の側に引き寄せられた世界観の中で、変化し、自分の、context へと変容させられているのが分かる。つまり、「意味」という対象が、手段であるはずの「言葉」の毒にあたって、変質を余儀なくされるのだ。

この手紙が、実際に戦場へ出かけた、ヒギンソンへ、無事御帰還を！ と書かれていることを考え合わせると、おおよその所で、語られている内容と、ディキンソンの言葉は合っているものの、彼女が自分の思いという context の中で、ヒギンソンの安否を問うていることが分かる。

つまり、「自分」という心の中心点を動かすことなく、「他」との距離を計ることを目的とするが故に、実際のヒギンソンは、まだ死んではいないのに“immortality”が語られ、まだ亡くなっている（Losses’ Test）訳で

はないのに、その修復（To constitute them — Gains）までが、とり行われるのだ。つまり、ここで起きているのは、「何」という対象の話ではない。その「何」というものから自分までの距離を計ることが、その関心の的となっているのだ。

或いは又、ヒギンソンが、戦場で負傷（1863年7月）したことを、遅れて知った、こちらにも又、眼の治療で、家を離れざるを得ない生活を余儀なくされていたディキンソンの手紙（L.290, 1864年6月初め）で、彼女は、ヒギンソンに、容体を教えて欲しいと言いながら、Nathaniel Hawthorne（1804-64）が死んだ話をし、その後に、自分の犬 Carlo のことを話す。

Carlo did not come, because that he would die, in Jail, and the Mountains, I could not hold now, so I brought but the Gods ——

カルロは来ませんでした、何故なら死んでしまうでしょうから、牢屋の中では、そして、山々を、私は持ち抱えることは今はできないので、代わりに、神様達だけを連れて来ました——

不謹慎とも思える、この犬のカルロと山々と神々の等列化、もっと初めから言えば、ヒギンソン、ホーソン、ディキンソン、そして、カルロ、山々、神々の並列化は、ディキンソンの心の距離からの基準にポイントを置いた等式である。「死」というもので、それらは全て結ばれている。事の大小は、「絶対」の scale の中では、かき消されるのだ。

そして、ヒギンソンの健康状態を再び尋ねて、詩の一部分だけが、添えられている。

The only News I know
 Is Bulletins all day
 From Immortality.

私の知っている唯一の知らせは
一日中の掲示板
不滅からの。

この詩 (P827) は、あと三連続いて完結する詩だ。それをこのように、一部だけ、病気のヒギンソンに書き添えるということは、ディキンソンにとって、言葉が、詩のように、それ独自として、一つの存在を持ち始めると、交換可能の通貨のように、一人立ちし、一般的な意味での「文脈」とは関係なく、引き出して、配布できることを意味する。それは、彼女の側だけが、その配布の仕方を知っている、言わば、「世界への手紙」なのである。⁽³⁾

ディキンソンは、三才の誕生日を迎えた、甥の Ned (Edward, 1861-1898) へも、やはり、目の治療先、ボストン近郊のケンブリッジより、手紙 (L.291, 1864年6月19日) を書いている。その中で、小さいネッドの視点に、自分の気持ちを合わせるディキンソンは、“His Niece” (彼の姪) と署名し、三才にもなったネッドは小さくなった視点のエミリーにより、“My little Uncle” (私の小さな叔父さん) と呼びかけられる。普通の意味での叔父や姪がここに居るのではなくて、彼女の思いの文脈 (マイナスとプラスを持つ物差し=距離を計る) の中で、新しい、叔父さんと、姪が出来上がる。私が小さくなる分、Ned は大きくなる。しかし、二人の距離は、おば対おいの時と同じ、めい対おじなのだ。言葉は、その指し示す「意味」と少し離れたところで、新しく存在し始める。

言い換えると、ディキンソンは、彼女の用いる measurement である、叔母 対 甥というスコープの中で、その物差しの法則にのっとって、新しい、「言葉」と「言葉の指し示す対象」との関係、を作っていくのである。叔母 対 甥は、よって、姪 対 叔父となる。言葉は、その指し示す「意味」から、離れる自由を獲得するのだ。

生涯に渡り、ディキンソンの変わらぬ友人であった、Elizabeth Luna Holland (1823-

1896) が、夫と共にヨーロッパから帰り、アマストを訪ねた後の手紙 (L.354, 1870年10月初め) で、ディキンソンは、再会できたことを喜ぶと述べてから (It was lovely to see you and I hope it may happen again)、気のおけない友人に対し、思いのままに、連想のように「今」の心境を語る。

To shut our eyes is Travel.
The Seasons understand this.
How lonesome to be an Article! I mean
— to have no soul.

「目を閉じること」は夢想することと結びついて、「旅すること」に変化する。この旅は、次の「季節は、このことを知っている」と抱き合わせると、「死」をも含むスケールの大きい「旅」も暗示しているのかもしれない。そして、「魂」を持つことの素晴らしさ、だから、目を閉じて、心の中の世界を見詰められることの喜びを、「品物」でない、つまり、魂を持つ人間の存在として、「淋しい」の反対、豊か、と言う。この後すぐに、夢の中のような映像が続く。

An Apple fell in the night and a Wagon
stopped.
I suppose the Wagon ate the Apple and
resumed it's way.
How fine it is to talk.
What Miracles the News is!
Not Bismark but ourselves.

リンゴが落ちて、ワゴンが止まる。そして、その二つを自分の「話」の中で好きに結びつけて、ワゴンがリンゴを食べたのだと語る。「話すこと」が楽しいのだと。そして、心の中で沸き起こるアイデアを、一つ一つ紡いでいくことが、世界への話題性を持つ「ニュース」であり、「奇跡」であり、「私達」であると、歴史上の人物の Otto von Bismarck (1815-98) よりも——この時、歴史の上で

は、普仏戦争（1870-71）が起こっているのだが——「私達」が素晴らしいニュースだ、とディキンソンは言う。

この映像、この言葉の流れ方、落ちていき方（リンゴが落ちた）は、常識の世界と、順序が違う。常識の世界では、リンゴが落ちてワゴンが止まるのではなく、ワゴンが止まり、リンゴを収穫していくのだ。その常識と違う世界が、何故そうと言えるのかの、何故の部分は「奇跡」としか説明されない。

しかしながら、この「奇跡」は、ディキンソンの使う、メジャメントによって、起こるのだ。リンゴがワゴンに食べられようと、ワゴンはリンゴを収穫していくのであろうと、この二つの距離は不変だ。言葉の意味は、言葉から、ずれ落ちていくが、両者の関係は、マイナス・プラスで、しっかりと固定されている。

そして、詩が書かれる。

The Life we have is very great.
The Life that we shall see
Surpasses it, we know, because
It is Infinity.
But when all Space has been beheld
And all Dominion shown
The smallest Human Heart's extent
Reduces it to none.

私達が今味わっている人生はとても
素晴らしい。
私達がこれから体験するであろう人生は
それを越える、と私達は知っている、
何故なら
やって来るのは、「無限」だから。
でも全ての「空間」が見詰められて
そして全ての「領土」が示された時
最も小さな人間の心の領域は
それを「無」に縮小してしまう。

この詩は、特別ディキンソンらしいテクニクに満ちているものではない。爆発するよ

うな、私達を魅了してやまない、相反するものが作り上げるダイアログの火花は、とりたてて、ここにはない。しかし、注目すべきは、友人への手紙の中で、散文の中から、自然発生的に歩き出す、「詩」の誕生である。目を閉じて、旅をする。リンゴが落ちて、ワゴンに食べられる。「人間の心」は、あの世の「無限」にまざる。これらのことは、一般常識の context と、別のところで花開く。

「世界」の意味は、「私」というプライベートな世界へ還元される。「あの世」は、「この世」の term で語り直される。そして、地の文が述べるように、そのことを「語る」こと自体が、楽しいのだ（How fine it is to talk）、とディキンソンは言う。言葉は、それを映し出すと、一般に考えられている「実人生」と別の回路で、言葉の世界を紡いでいく自由を得る。というのも、この手紙の地の文が示すように、ディキンソンは、自らの詩の誕生を見守る母胎であり、揺りかごでもある、独自の「文脈」を保有しているからである。

常に愛しい存在として、交流を続けた、姪の Louise Norcross (1842-1919) 宛、1872年頃と推定される手紙 (L.374) の中で、ディキンソンは、言葉について、次のように、詩の形で述べている。

A word is dead, when it is said
Some say ——
I say it just begins to live
That day.

言葉は死んでしまう、それが発せられた時
と人は言います——

私はこう言います、生き始めたところだと
その日に。

言葉は、ここで、「現実」という、オリジナル、にとって代わり得る、コピーとしての「新たな創造物」だと、描かれている。この「ディキンソンの言葉」は、一方で、対象という「世界」を「欠いている」ように思われる

かもしれない。しかし、反対に、ディキンソンは、その「欠いていること」を強みにして、「世界」と対抗しうる「独自の世界」を作る「契機」と捕らえている。何故なら、ディキンソンは、言葉を、或いは、常識を、自分の文脈の中の意味へと、作り直し得る、きっかけを、それらと対抗することで、確保するからである。

やはり、ルイーズへの手紙 (L.379, 1872年後半) で、ディキンソンは、殆ど、アトランダムと思える内容で、自在に語った後、次のように述べる。

Do you remember what you said the night you came to me? I secure that sentence. If I should see your face no more it will be your portrait, and if I should, more vivid than your mortal face. We must be careful what we say. No bird resumes its egg.

ルイーズが、ディキンソンに何かを伝え、その言葉をディキンソンは、今だに保管 (secure) している、と言う。言葉は現実とは無関係に生き延びることができるのだ。そして、続ける。その言葉は、万が一、ルイーズが亡くなった時、彼女の肖像画よりも、或いは、彼女の現実の顔よりも鮮やかに、心に残っているだろうと。鳥は産み落とした卵を、再び体の中へ入れることができないように、言葉も又、生まれた以上、逆回転で、姿をくまらず (resume) ことはできないと。そして、詩の一節が書かれる。

A word left careless on a page
May consecrate an eye,
When folded in perpetual seam
The wrinkled author lie.

紙の上の不注意に残された言葉一つ
人の眼には聖なるものと映るかもしれない、
折り目を付けてずっと畳まれていた

しわしわの作者がそこにいる。

この散文の地の文より、浮き上がるように表面に迫ってくる「詩」は、言葉という、記号から成り立っているにもかかわらず、本体の何を語ったのかという「何」の方をさし置いて、「しわしわの作者」という「姿」を持つ。暴力的なまでの、紙面の上に置き忘られていたに過ぎない「言葉」 (A word) が、紙の折り畳まれた「しわ」と一緒に、肉体を持つ「人間」のような、「作者」として、立体的になる。これは、今まで述べてきたように、「欠けること」 (言葉) が、「全」 (意味) を、欠けるが故に——例えば、家の外を知らない、家の中の存在として、美に対しての、カンガルーとして、或いは、ディキンソンの言葉として——贖うという、「欠如」の「存在」であると、言うことができる。

ディキンソンの言葉は、このように、言葉の本体であるらしき「意味」から解放されることにより、新しく、「言葉」として、再生、復活するのだ。

(6) 自由になる：堅固な「家」 —— “I'm Nobody” ——

ディキンソンの「負」の極限における自己との対決を、「プラス」の中に位置付ける、大きなうねりとして、Sandra Gilbert に代表されるような、十九世紀父権制社会における、女性作家達の「負の位置」に注目し、その負の位を、如何にディキンソンが直視し、克服したのかという、男性優位社会における、女性作家の共通の問題点に焦点を当てた研究がなされて久しい。⁽¹⁾

そして、男性により植え付けられた、女性のイメージの中で、一方で創作者であり (従来の男性の位置)、もう一方で、女性である (慎ましかでなければならない) 作家達が、自己を確立することが、如何に困難であったか、という認識は、Virginia Woolf (1882-1941) の *A Room of One's Own* 以来、現在に至り定着しつつある。⁽²⁾

ギルバートは、ディキンソンの“Nobody”の視点である“female Self”は、男性中心社会の“male Other”との関係で産み出されたものであり、⁽³⁾ 怒り、狂気、恐怖といった抑圧された感情と、それを終始見詰め続けた、もう一人の自分 (a goblin self within the self) という二重の構造が、その結果、産み出され、⁽⁴⁾ 又、その二つに引き裂かれた自己を最後まで見続け、自らの paradise を捨てることを拒み続けた、ディキンソンを、⁽⁵⁾ 勝者として讃えている。

が、もう一方で、ディキンソンが、もし、“Nobody”ではなく、“Somebody”を選んでいたら、彼女こそ、Woolf の述べるところの、Judith Shakespeare になっていただろう (if she had let herself be Somebody, that Somebody would have been Judith Shakespeare) と、ディキンソンが、Somebody を選択しなかったことに、一抹の無念さを残す。⁽⁶⁾

又、David Porter は、ディキンソンの言葉の威力について高く評価しながら、その言葉が外の世界と、結びついていないことに、不安を抱く。

...Dickinson's language possesses a menacing force that is new in American poetry.... By this intense action, the exterior world is irretrievably transformed into the linguistic strategies of the mind. Thus preoccupied with itself, the consciousness... finds itself unavoidably suffering a transcendental homelessness, the self terrifying and constant, intense without a cause, heightened feeling with no content.⁽⁷⁾

、、、ディキンソンの言葉はアメリカ詩に今まで無かった、驚くべき力を持つ、、、それは、外の世界を有無を言わず、心の言語活動へと変質させる。自らに心を奪われ、意識は、超えてしまったという行く当ての

無さを、味わうことになってしまう。又、常に一定でいて恐ろしく、理由を持たず熱烈で、中身を持たずして緊張感を伴うという自己を発見するのだ。

或いは、ディキンソンの言葉と、それが映すはずである実人生との距離の長さについて、ポーターは、危惧感を抱く。

Rather than enacting the choice of a human attitude, her poems speak and speak in the absence of a stance. There was the enormous need, and this without a purposeful bearing is the Dickinson extremity of the modern dilemma.... Dickinson... is a paradigmatic creature of the void with a will to words that removes her twice over from the world.⁽⁸⁾

人の置かれた状況について語るというより、彼女の詩は「無」の立場を語り、語り続ける。絶対的必然が一方でありながら、その理由は何も示されないまま、置かれていて、そのことが、ディキンソンにおける究極のモダニズム的ジレンマである、、、ディキンソンは、、、「無」を語る達人、しかも言葉に託す意志の強さが、彼女をして、現実から二倍も距離を遠のけてしまうというタイプの。

ポーターが、この二つの引用で述べている、“intense without a cause” (理由を持たず熱烈で) や、“this without a purposeful bearing” (目的なしに) は共に、ギルバートによって示されるように、女性として周辺に置かれている怒り、恐怖、絶望というものを加味すれば、“intense with a cause” や、単に“the enormous need” と解釈し直せるかと思う。

しかし、ここで注目したいのは、ギルバートもポーターも、ディキンソンが、外の世界から、自らを隔離したかに思える“Nobody”

の視点を、「外」との関連を持たないこととして、否定的に見ていることである。

先程のポーターの引用で言えば、ディキンソンの言葉が、外部 (exterior) を持たないこと、もしくは、もうそれと理解できない程、「外部」が、変質 (transformed) していること、或いは、自らの言葉に熱中するあまり、それが、どこから生まれたのかを忘れてしまうこと (homelessness)、或いは、「語ること」 (speak) に主点が置かれ、「何」の部分が見えないこと (absence of a stance) を、又、語ろうとする「意志の力」 (will) が却って、それが語る「本体」であるべき、“the world”より、ディキンソンをして、遠のけてしまうということを、彼の言葉は、嘆いているように響く。

しかし、既に本稿で見てきたことから明らかにされるように、“I’m Nobody” (私は誰でもない) の視点こそ、ディキンソンの作り出した、究極の、自由の形、に私には思えるのだ。P288 は、次のように始まる。

I’m Nobody! Who are you?
Are you — Nobody — Too?
Then there’s a pair of us!
Don’t tell! they’d advertise—you know!

How dreary — to be — Somebody!
How public — like a Frog —
To tell one’s name — the livelong June —
To an admiring Bog!

私は誰でもない! あなたは誰?
あなたも——誰でも——ないの?
なら私達は一組みね?
言ってはだめよ! みんな宣伝するのだもの
——知ってるでしょ!

何て退屈でしょう——誰かさん——なんて!
何て公なんでしょう——カエルのように——
自分の名前を言うなんて——六月いっぱい——
ほめ讃える泥んこの池に向かって!

ここで「話者」は、「私は誰でもない」と宣言する。これは、“Somebody”に、ばつ、を付け、それを否定した上に誕生する“Nobody”という存在である。言わば、これ以上欠けることのない、究極の「欠如」の存在だ。“No”+“body”とは、「形」を持たないと言う「形」を持つ。

ディキンソンが、ここでしていることを、本稿の論の流れの中で、位置付けるとするならば、次のようになる。即ち、ディキンソンにとり、“Home”が物理的 boundary であったように、ディキンソンはここで、“Nobody”という「枠」を「円周」として、その中に、“Somebody”という「大多数」側を取り込んでいたのだと。

思い出してみよう。「家」はディキンソンにとり、「家の外」を意識することにより、初めて、その価値を充分高めうる、彼女の「死守すべき砦」である。“Nobody”の“no”というアイデアも又、まず、権威としての、外の世界、絶対多数側の“some”としての“Somebody”の存在があって、初めて、導入されうる概念である。

言い換えると、ディキンソンはここで、ポーターの言うような、外との世界の接触を絶つ形で、自分の世界を言葉の中に幽閉するのではなく、むしろ、外と中との拮抗関係の中で、たった薄い一つの線の壁、しかしそれは同時に、鋼鉄の boundary である「円周」という概念 (言葉) をして、そして、その形 (家) を利用して、「中」に居ながらにして、「外」を自分の手中に入れるのだ。“Somebody”は“Nobody”によって、取り囲まれてしまう。“Nobody”であるはずの、欠ける側であるはずのディキンソンが、絶対多数側の“Somebody” (全?) の優位に立つのだ。

そして、ここが、ディキンソンを最も強い詩人にさせる、一つの理由となるのだが、ディキンソンは、「世界」を、自分の領地内に、「円周」という形で導入しながら、丁度、「家」が、外の世界に対してそうであるように、自

分の位置が、「周辺」に位置することを、決して忘れないのである。

再び、詩に戻ってみよう。まず、“Nobody”と宣言することで、「話者」は、それと対峙する“Somebody”を捕らえる。“Nobody”は自らを「円周」として、“Somebody”を中に封じ込める。そして、話者は、私達読者に、“Are you—Nobody—Too?”と呼びかけることで、“Somebody”以外の全ての領土を、「自分の世界」として、私達に示す。私達は、その領土の広さを垣間見る。

そして、話者は目を転じて、その広い領土から見詰めると、“Somebody”であることは、“dreary”（退屈）で、あまりにも一般的（public）で、“like a Frog”（カエルのような）と言う。詩自体は、カエルのゲコゲコという声、対、それに、うっとりとする、泥んこの池（Bog）、との構図で終わる。私達読者は、“Nobody”の領土の広さに、一瞬、息を飲むのだが、次の瞬間、その形は「なかったのだ」と気付かされる。

ディキンソンの手紙を通して今まで述べてきたように、私はこれを、彼女の「家」の喪失と、「喪失の家」の創作、との関係で読む。思い出してみよう。ディキンソンにとり、「我が家」は、心の寄り所である。しかし、成長するにつれ、エデンの園にも匹敵すると考えたい、心の砦、「家」は、甚だしく修復の必要が出てくる。つまり、既に述べてきたように、ディキンソンにとり、中心であるべき「家」は、そもそも「中心」を欠く存在であった。それを、「失った」、よって、新しく「得た」、という、ディキンソンの物差しで見詰めると、この甚だしい損失は、莫大なエネルギーをもって、贖われなければならない。そして、そうやって、損失の味を経験した後の、復活とも言うべき「全」の姿である、「エデンの園的我が家」という新しい存在は、ディキンソンの心を、求心力をもって、その中心へと向かわせるのだ。

この「中心を欠いた中心」という存在を、もうこれ以上、壊れないという形で、最終的

な砦——「堅固な家」——として、ディキンソンの作り出した、自分の boundary が、この“Nobody”であると言える。この boundary は、ディキンソンの「家」がそうであるように、自分を守り、且つ、自己を外へ開放する、最小ユニットだ。

モビールのように、自由自在で、しかも頑強な boundary である、“I’m Nobody”という視点は、ディキンソンの「家」に見合う、ディキンソンの創造の世界の「家」なのである。

そもそも、外の大きな世界に対し、没交渉であったとされる、とりわけ晩年十年のディキンソンの生活自体、⁽⁹⁾ 外の世界を欠いた状態、“Eclipse”（食）、とも取れるかもしれない。しかし、ディキンソンが、P199 “I’m ‘wife’——I’ve finished that”（私は「妻」——あちらは終えた）でも述べているように、その「欠けた」状態は、反対側から見れば、欠けたのは「あなた側」という、「外」の世界に居る人々ともとれ、どちらが「完全」で、どちらが「食」なのかは、判断しがたい。⁽¹⁰⁾ 何故なら、「私」という全体性を維持できることの方が、「人々との関わりの中で変化していく私」という、自分を失ってしまうことよりも、「より欠けない」状態かもしれないからだ。

だからこそ、ヒギンソンが、ディキンソンの孤立した生活体制を、“It is hard [for me] to understand how you can live s[o alo]ne”（L.330 a, 1869年5月11日）と気使うことに対する、ディキンソンの答えは、

You noticed my dwelling alone——To an Emigrant, Country is idle except it be his own. （L.330, June 1869）

一人で、住んでいるとおっしゃいましたが——「移民」にとっては、「国」は、意味がないのです、それが、自分の国以外は。

と、自分が、「自分の世界」の住人であることを、伝えさせるのだ。そして、ディキンソン

の有名な生きることの喜びの台詞、“the mere sense of living is joy enough” (生きている感覚自体が喜び)、⁽¹¹⁾ や “To live is so startling” (生きるとは、こんなにも驚くべきこと)、⁽¹²⁾ をディキンソンをして、発信させるのである。

ディキンソンは、大事な「家」という核を失う。そして、その喪失故に、「喪失の我が家」として、彼女の「家」を復活させる。一方で、ディキンソンの「たった一人のカンガルー」という、痛烈なまでの自己の認識がある。しかし、もう一方で、ディキンソンは自己を決して見捨てず、権威である “English language” より、自分の言葉、“Whippoorwill” を作り出す。ディキンソンは、「世界」の枠組みを利用し、それを解体し、自分の並べ方で、「自分の家」を作る。ディキンソンは、P657 “I dwell in Possibility — / A Fairer House than Prose——” (私は可能性の中に住む——／それは散文より美しい家——) で、想像の「家」を作り、そして解体させる。⁽¹³⁾ その、作る、壊す、の繰り返し、ディキンソンをして、“Nobody” という、閉じる形を持たない、向こうが筒抜けの、輪っか、を作らせるのだ。

これは、ディキンソンの言葉のみが作りうる「家」である。そして、“Nobody” という視点、且つ、“Nobody” という物理的境界線、もっと具体的に形として表現するならば、「円周」、がディキンソンがオースティンへの手紙で、願望と希望の入り混じった中で伝える、“home is faithful, none other is so true” という、ディキンソンの「家」を、守り、そして、もう一方で、その大事な「家」を、外へと開放する「形」となるのである。

言い換えるならば、“My Business is Circumference” とは、ディキンソンにとってなくてはならない、中心である「家」としての、物理的境界線を作りながら、もう一方で、“Nobody” として、“Somebody” を凌駕する、外へ向けての、解放の形を作ることを意味するのだ。そして、それは、組み立て、解

体、自由自在の、持ち運びできる「自己」のユニット (unit) としての、“Nobody” という、形のない「形」の、ディキンソンの「家」なのである。

エマソンは、彼の essay、*Nature* (自然論) の中で、次のように述べている。

I become a transparent eyeball; I am nothing; I see all; the currents of the Universal Being circulate through me; I am part or parcel of God.⁽¹⁴⁾

私は透明の眼球になる。私は無である。私は全てを見る。「宇宙の存在」は、私を通して、流れ出る。私は神の部分、もしくは、小さなユニットである。

「私は無である」というところまで、エマソンとディキンソンは同じである。ディキンソンも、「私は誰でもない」と言う。しかし、後半の、宇宙の存在が私の中を駆け巡る、のところが、エマソンとディキンソンとを切り離す。何故なら、ディキンソンは、神の一部であるという満足感とは、別の土壤で、カエルの声を聞くだけだからだ。一体、「透明の眼球」という枠と、“Nobody” という、ユニット、は、どちらが、多くのものを、見ているのだろうか。

I'm Nobody ! Who are you ?
Are you——Nobody——Too ?

[註]

(2)(1) *The Letters of Emily Dickinson*, ed. Thomas H. Johnson and Theodora Ward, 3 vols. (Cambridge: The Belknap Press of Harvard Univ. Press, 1958).

尚、本稿に引用した手紙は全て、Johnson、Ward 編集の *Letters* に拠る。大文字Lに続けての番号は、上記編集に拠る、通し番号である。以下、*Letters* と略記。

(2) Thomas H. Johnson, ed., *The Complete*

Poems of Emily Dickinson, 3 vols. (Cambridge: The Belknap Press of Harvard Univ. Press, 1955).

尚、本稿における詩の引用は全て、Johnson 版に拠る。Pナンバーは、Johnson の、通し番号である。以下、*Poems* と略記。

- (3) "Sumptuous Destitution", Richard B. Sewall ed., *Emily Dickinson: A Collection of Critical Essays* (Englewood Cliffs, N. J. : Prentice-Hall; 1963), pp.128-30.
- (3)(1) Thomas H. Johnson, *Emily Dickinson: An Interpretive Biography* (Harvard Univ. Press, 1955; rpt. New York: Atheneum, Macmillan), p.35. 以下、*Emily Dickinson* と略記。
- (2) Richard B. Sewall, *The Life of Emily Dickinson*, 2 vols. (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1974), Vol. I, xviii.
- (3) Johnson, *Emily Dickinson*, pp.31-38. Sewall, *The Life of Emily Dickinson*, Vol. I, p.64.
- (4)(1) *Letters*, Vol. II, L.268 の T. W. Higginson 宛の手紙で、Dickinson は "My Business is Circumference" と述べている。又、Circumference という言葉の入った詩を、Dickinson は、17編 (S. P. Rosenbaum, ed. *A Concordance to the Poems of Emily Dickinson*, Ithaca : Cornell Univ. Press, 1964) 書いている。
- (2) Emerson は、彼の essay、"Circles" の中で次のように述べている。"The eye is the first circle; the horizon which it forms is the second; and throughout nature this primary figure is repeated without end.", *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, ed. Edward Waldo Emerson, *The Centenary Edition*, 12 vols. (1903-1904; rpt. New York: AMS Press, 1979), Vol. II, p.301.
- (3) 又、Emerson にとって、打ち碎かねばならない、"circumference" が、Dickinson にとっては、何故、永遠の「形」となったかは、浜田美佐子『「不死」と「円周」——エミリー・ディキンソンの永遠の「形」』『東海女子大学紀要』第12号 (1992)、pp.79-91 に詳しく述べてある。
- (4) *Letters*, Vol. II, L.287, L.302.
- (5) 後にディキンソンは、ヒギンソンが彼女を救

ってくれた、"You were not aware that you saved my Life" (L. 330, 1869年6月) と、だからこそ、直に会ってお礼を言いたいと、ヒギンソンをアマストへ招待する旨の手紙を書いている。

- (6) *Letters*, Vol. II, L.271.
- (7) *Ibid.*
- (8) Jonathan Culler は、Derrida の考える、speech と writing との関係を説明する際に、辞書の本体と、その補足との関係を引き合いに出している。そして更に、「補足」が一方で "an inessential extra" であり、又、他方、それは "to compensate for a lack in what was supposed to be complete in itself" と述べているが、これは、本稿における、ディキンソンの欠如と「全」との関係と、相通するものがある。但し、ディキンソンの場合、「補足」は「本体」を凌駕する。*On Deconstruction: Theory and Criticism after Structuralism* (Ithaca: Cornell University Press), pp.102-3.
- (5)(1) *Poems*, P276 "Many a phrase has the English language" (たくさんの言い回しが英語にはある)。
このディキンソンの language making については、浜田美佐子『世界と「私」との対話——Emily Dickinson と Ralph Waldo Emerson』『東海女子大学紀要』第10号 (1990)、pp.41-5 に詳しく述べてある。
- (2) ディキンソンは、しばしば、measure という言葉を使うが、例えば、本の貸し借りの話をした後で、ディキンソンは自分の「物差し」の話を次のようにする。"You could choose—as you did before...—except where you 'measured by your heart,' you should measure—this time—by mine." と。これは、どのように計っても、本体 (your heart) は変わらないのだが、「計った」ということが、本体に取って替わりうることを示す (L.300, 1864年頃——Samuel Bowles への手紙)。
- (3) P441 "This is my letter to the World" (これは私の世界への手紙です), *Poems*.
尚、この「世界」への発信については、浜田美佐子『エミリー・ディキンソンの手紙と詩に見られる話し手と聞き手』『東海女子大学紀要』第9号 (1989)、pp.23-35に、詳しく述べてあ

る。

- (6)(1) Sandra M. Gilbert & Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination* (New Haven: Yale Univ. Press, 1979).
- (2) Virginia Woolf, *A Room of One's Own* (New York : Harcourt Brace, 1929).
- (3) *The Madwoman*, p.587.
- (4) *Ibid.*, p.622.
- (5) *Ibid.*, p.645.
- (6) *Ibid.*, p.558.
- (7) *Dickinson: The Modern Idiom* (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1981), p.238.
- (8) *Ibid.*, pp.238-9.
- (9) *Letters*, Vol. II, p.536.
- (10) 浜田美佐子『「無かった話」と語られた内容——エミリー・ディキンソンの生と死の歌』「東海女子大学紀要」第11号 (1991), pp.62-3.
- (11) *Letters*, Vol. II, L.342.a, 1870年8月16日(ヒギソンから妻宛の手紙の中)。
- (12) *Ibid.*, L.381, 1872年後半。
- (13) 浜田美佐子『世界と「私」との対話』, pp.36-8.
- (14) *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, Vol. I, p.10.

[Abstract]

Emily Dickinson's "Measurement"
—— "I'm Nobody" ——

Misako Hamada

It is said that Emily Dickinson almost imprisoned herself in her home particularly in the final decade of her life. If that was the case, what was "home" for Dickinson, and how did the decision to stay home shape her poetry as it is? The starting point of this paper is, therefore, to look for the evidence how Dickinson regarded her home by close analyses of her letters sent home when she was away and those she sent to Austin, her brother, when he was away.

Secondly, the paper examines how the boundary Dickinson imposes upon herself as "home" could work not only as a confinement but as the outlet through which she can connect her inner self with the World outside as her poetry does. The letters to Higginson, the influential literary critic of the time, are examined to show in what manner the outside world is important for Dickinson in order to keep her integrity as a person and as a poet, who has made a decision, nevertheless, to stay home.

Thirdly, the comparison is made between how Higginson functions for Dickinson as an outside force so that she can tell how far she is from him, and how "English language," as in P276 "Many a phrase has the English language——/ I have heard but one——," works for her benefit so that she can recreate her own language out of the established English language.

Finally, the idea and the shape of "Nobody" is discussed as the ultimate unit of Dickinson's measurement. As Dickinson's famous phrase, "My Business is Circumference," indicates, "I'm Nobody" works as a boundary, as Dickinson wishes her "home" should be, to protect her inner self and also to liberate her from the confinement of her inner self.

This could be done because "Nobody" is a unit which refuses to eclipse any further; instead it becomes potential even to enclose "Somebody" within itself to interact with it and eventually to release us to the sphere beyond the limit of "Somebody."

Although "Nobody" does not contain its center, since it is shapeless, yet it works as a center for Dickinson in the same way her "home", though it is no longer the way it has been, she wishes, to be beyond changes and influences and as free as a portable "house" to be constructed, deconstructed, and to be carried away. And the creation of "Nobody" as a framework to her poetry is for Dickinson to resurrect her lost "home" in her language.